

梅翁寺[寺]

1688年に建てられた梅翁寺（ばいおうじ）は、約800年前に中国から伝来した禅宗に属する曹洞宗の寺である。曹洞宗の教えの中核を成すのが禅を組むこと、すなわち坐禅だ。坐禅の目的は、身・息・心を調和させて無の境地に達することである。禅は足を組んで座った状態で行われることが多いが、歩いたり動いたりしながら行うことも可能だ。曹洞宗は、日本の仏教宗派では3つのみ存在する、坐禅を行う宗派のうちの1つである。

寺の本堂の中央には医薬の仏である薬師如来像があり、その両脇に日光菩薩と月光菩薩の像が祀られている。

寺の境内には子どもや旅行者の守護者として知られる慈悲の仏、地蔵菩薩の像がある。地蔵菩薩は一般的によく見かける像で、頭を丸めた修行僧が上向きに目を閉じた姿で描かれることが多い。ピンシャン地蔵と呼ばれるこの寺の地蔵菩薩は一風変わった姿をしており、足を温泉に浸して座っている。人間が長く健康に生きられるように、地蔵菩薩は疾患やケガ、病気を引き受けてくれると考えられており、昔からの伝統に倣い、健康に不安を抱えた人たちが、温泉に浸した手ぬぐいで地蔵の体の該当する部分をさすっている。

梅翁寺で開かれる主要な祭りに花まつりというものがある。これは釈迦牟尼仏陀の誕生を祝う行事だ。伝説によると、仏陀は生まれるとすぐに7歩進み、天を指して、きれいな雨で清められたと言われている。花まつりでは、訪れた人々が釈迦牟尼像の上から甘茶をかけてその出来事を再現する。通常、日本の他の地域では花まつりは4月8日に行われるが、梅翁寺では5月8日に行われる。これは温泉の発見を祝う地域の祭りと同時開催するためである。